ルリ子という名前の人と結婚した気がする。私の大好物はドーナツなので彼女も好きなはずだ。うちの近所に三忠という豆腐ドーナツのお店があって私はよくそこのドーナツを職場に差し入れとして持っていったと思う。本を散らかして整理して、足りないようなものをメモしたり奥の部屋で寝ている管理人のおじいさんが歩けるような気になって、ベッドから転げ落ちないように見張ったり、オムツを交換したり、とにかく忙しい職場だったのだろう。そこにルリ子がいたのだとしたら、おじいさんはルリ子のことをたいへん気に入った。「ルリ子サン、ルリ子サン」「なんですか、おじいさん」ルリ子が部屋に入るとおじいさんは少し照れ臭そうにしている。ルリ子は慣れた手つきでおじいさんの処理にかかる。私は店の前をドーナツ片手にうろちょろしながら、処理が終わるのを待っている。たまたま通り掛かった人を装いたいから、いつでも耳はそばだてている。周囲に怪しまれないようにたまには店の前から離れてみたりもする。店の玄関の薄いガラス戸はいつも少しだけ開いて見える。「戸じまりもせずに不用心だなあ」と思いながら戸に手をかけると、実はしっかり鍵はかかっている。そんな様子だから、隣の帽子屋の店先をながめているふりをしていれば、蛇口をひねる音やらポリバケツのフタをあけ閉めする音やらが耳に入ってくる。帽子屋の店主らしき人はいつもレジの後ろで座りながら携帯電話をいじっていて、こちらの様子にはまるで関心がないようにみえたので、気兼ねなく帽子をながめるふりをしていられた。帽子屋の向かいの金物屋はたいていいつも閉まっている。朝早い時間などには、たまに背の低いおばあさんが内側からシャッターを開けて、ゴミ袋をいくつか外に出して、いそいそとシャッターをまた降ろして店の中に消えていく、そのような姿を見掛けることもあるだろう。「金物屋のばあさんはどうしてるかね」「さあ、どうでしょうね」浴室で反響する二人の声が遠くきこえる。ああ、まだ入浴中か。私は自分がルリ子に体をあらってもらっている姿を想像し悲しい気持ちになった。私は気恥ずかしく、なかなか目をあわせられないでいるが、たまに視線があっても彼女はまるで私のうしろのタイルの染みを見ているかのように感じられたからだ。彼女はゴム手袋をつけているから、優しく洗っているつもりでも、こすられるとやはり痛い。もう少し優しくお願いしますとも言えずに私は痛みにただ耐えている。そのうち私の物が脈打ちながら段階的にふくれてくる。抑えようもないから私はただ「ごめんなさい」という。彼女は「お構いなく」とだけ言って、同じ調子で洗い続け、視線はやはり私をすり抜けていくようだった、それが私を余計にみじめにさせる。店のガラス戸の開くカン高い音で私は我にかえった。偶然通りかかった体で少しおどろいた様な表情をつくる筈であったが、夢想に半ば捕われたまんまの私は阿呆のように開いた口をとじることも出来なかった。ガラス戸の前にはおじいさんが立っている。2本の足でしっかりと地面を踏みしめて、戸にかけられた腕からは下シャツの下にたくましい二の腕のスジが透けてみえている。大きく深呼吸を2回して、今日は調子がいいとでも言わんばかりにムネを両こぶしでゴリラのように交互にたたいて、ノドの奥をガアガア言わせている。痰の切れが悪いのだろう。私はおじいさんと散歩に出ることになった。おじいさんはにこやかだった。今日はすっきりしているとおじいさんは言った。「どういうわけかすっきりしてるか、なぜかわかるかね」おじいさんはまたガアガア喉を鳴らした。それからおもむろに息子の話を始めた。息子は画像の先生なのだという。たくさんの写真をとるのだそうだ。それはたいへんですねと私は言った。おじいさんは神妙な面持ちでうむと頷いた。商店街を抜けた先の公園にはまだ学校から帰ってきたばかりらしい子供が砂をいじったり、走り回ったりしていた。ランドセルがベンチの横に散乱している。ベンチに腰かけたおじいさんの目にはうっすら涙がうかんでいた。冷えたのだろう。小さい頃はシュウチャン、シュウチャンといってな、とおじいさんはズボンのポケットからおもむろに飴玉を取り出して口内に放り込んだ。おじいさんは飴玉を舐めながらシュウチャン、シュウチャンといっているらしいが、飴玉のせいでうまく聴き取れない。何事か発話しながらときどき左の頬を膨らましたり引っ込めたりしている。私はおじいさんの左側に腰かけているから、おそらく反対側では飴玉の動きに合わせてそれが引っ込んだり膨らんだりしているに違いなかった。大方シュウチャンの子供の頃の話が終わる頃に飴玉を舐めきって、おじいさんはひとり遠い目をしている。私の横には砂場があって、おじいさんの横にはブランコがあった。砂場では子供たちが山をつくり、水をかけてこれから白砂で山を固めようというところだった。ブランコでは二人の10にも満たないほどの子供がどちらが靴を遠くまでとばせるかを競っているらしい。そばではブランコの柱を軸に同年代の子供が逆円錐状に回転運動を繰り返している。私たちの座っているベンチの後ろにもう一つベンチがあって、みると女児がけだるそうに仰向けに横たわっている。息遣いが少し荒い。隣の砂場ではお構いなしに子供たちが砂の山を築き上げるのに夢中になっている。女児はやはりふう、ふうと息遣いが荒い。ブランコでは無感動に回転運動やら振り子の運動を反復しつづける子供たちがいる。その他、姿をみせては草陰に消えてしまう子供たちはかくれんぼとか鬼ごっこに類する遊戯をしているらしい。おじいさんは口を半開きにして、見るともなしに目の前の鉄棒か並木か、あるいはその先にある何かを眺めているようにもみえる。女児の息遣いが次第に仰々しいものになっていく。ひいとかはあとか言い出した頃になり、砂の山を手掛けていた子供の一人が「姫がたいへんだ！」とわざとらしく大声をあげた。姫様どうしたのと子供たちの注目は一気に後ろのベンチの女児に集まった。女児は産気づいたようになっている。「ホッサだ、ホッサだ」と誰かが言った。「ホッサがきたぞー！」とまた誰かが叫んだ。おじいさんはゆっくりと後ろを振り返った。口はやはり半開きのままだった。鼻の下が心持のびていて、何も考えていないような顔をしてただ女児を眺めていた。ベンチによりかかって結んだ髪を弄いながら「姫だいじょうぶ？」と別の女児が言った。視線は宙に漂わせ、片脚はバレリーナがやるみたいにベンチの上でふわふわさせている。シュウチャンはな、とおじいさんは言った。シュウチャンはな、いや私はシュウチャンといってたわけではないがみんなこう呼んでいたものだから。私はシュウとかシュウジとかそんな感じで呼んでいた気がするよ、今となっては定かではないがね。子供の頃はおとなしいのかやんちゃなのかよくわからなかった、多くの子供がそうであるようにね。だからふつうの子供であるといえばそうだった。要するに、私はその彼のことについては申し訳ないがよくおぼえていないということだ。輪郭はおぼろげに描くことはできるだろう、その程度。当時は子供がたくさんいたから。私はどこで誰の子になんと挨拶すればよいか心得ていた。当時はな。いまとなっては誰がどの子だか、関心がない、だから思い出そうとすれば思い出せるかもしれないが、とにかく関心がない、ひどい話だ。おじいさんはまた涙をにじませていた。私は自分のポケットにも飴玉があるかもしれないと思い急いで探ってみたがなかった。ひょっとしたらおじいさんのポケットにはまだ飴玉が何個かあるかもしれない。私なりに慰めようとしたが人の飴玉をさあ舐めてごらんと言うわけにもいかなかったし私はズボンと上着のポケットの探索を一回りしたらかける言葉も見つからず、おじいさんが嗚咽をし始めたら背中をさすってあげようと思っておじいさんの足元あたりをみて何もしないでいた。おじいさんは真冬なのに外套どころか下シャツ一枚だったので、がたがた震えていた。寒いでしょう、というと、そりゃもう今日は冷えるねえという。若い頃はよく裸で川に飛び込んだものだ。私は仲間の中でいちばん泳ぎが達者だった。それだけが取柄でそれをとったら私にはもう何も残らないといってよかった。高校に入ると私より達者な人がいくらもいることがわかった。そのときから私は何者でもなくなった。とりわけ運動神経がいいわけでもない、勉強も中くらいより少し悪いくらいで、美術やら音楽も人並みに下手くそで音痴だった。性格も特別優しい気質でもない、人好きのするようでも頼りになるでもない、人より優れたところなど何一つなかった。顔ものっぺらとしていて誉めたものではない。私はまったくふつうの人でそのことに人並みに不満を抱いているところまで含めてすべてが平凡だった。私にもしかし、というべきか、だからというべきか若い頃は若者なりの苦悩を抱えるようなこともあった。ただここで語るべきことは何一つない、というのはあまりに平凡で退屈だから。私にも親しい友達がいたと私は思っている。私は列の先頭で腰に手をあてがっている。すると後ろから背中をつつかれる感触があり、振り返ると同じ背丈だが私よりわずかに高いらしい男が両手を私の背中のほうへまっすぐ伸ばして知らぬ顔で立っている。向き直るとまたつつかれる感触を背中に感じる、振り返ると男が同じようにただ立っていて視線はまっすぐ、指導者の声に集中している様子で私は気のせいかもしれないと思ったが、私が向き直るとやはりまた指先の感触を背中に感じる。私はまた振り返る、男は真面目くさった顔をしている。そういうことを繰り返していた、それが最初だった。次に会ったのは食堂だった。男は私より先にテーブルについて昼食を食べていた。私は彼の前に座り、やあとかこんにちはと言ったかもしれない。彼もたぶんそのような言葉を返した、それだけだった。お互い食べ終わると食器を片付け職務に戻った。私は草むしりに没頭していた。雨上がりでいつもよりよく抜けるものだから夢中で引っこ抜いた。建物の裏側は目につかないだけにそれだけやりがいを感じるし他に気を遣うこともなかった。このときが3度目だった。私は草を抜きながらしゃがんだ姿勢で少しずつ後退していた、すると何かにぶつかったのだ、それが彼だった。彼もしゃがんで作業していたものとみえ、振り返ると私の進行方向に倒れこんでいた。両手は草と土にまみれている。私はあわてて謝罪の言葉を述べた。彼は倒れたまま頬ぺたを地面につけていた。不安にかられ肩をゆすると彼は気持ちいいねと言った。ずっとこうしていたいと。私は同意するつもりでただ黙っていた。それからまた起き上がり草むしりを再開した。私も作業にとりかかった。話を一時中断しおじいさんは訝し気にズボンのポケットを探り、どうもおかしいと言った。キャンディがない。私は確かにポケットにしまっておいたはずだったのだが、そのキャンディがどういうわけか見当たらない。彼は私のほうに疑り深いまなざしを差し向け、おかしいともう一度言った。どうしたのでしょうねと私は言った。ああ、どうしたのだろう。キャンディがほしければいくらでもやるのだが、黙ってとられたらやはり気分がよいものではない、もちろん私が家に忘れてきたという可能性もないではないが、私はキャンディを靴箱の上の容器の中にいつでもいれておくようにしてあって、靴をはいてからひょいとつまんでお守り代わりにもっていくのを長年の習慣としているわけだから、そうしたひとの習慣はもういわば小脳にでもたたきこまれているようなものであってほとんど空気を吸うのと変わらないような行為になっているものをそうそうわすれるものではない、であるとすればまあポケットが破れているとか。といいおじいさんはズボンのポケットの裏地を引っ張り出してほら、この通りとでも言わんばかりの表情をつくって肩をすくめてみせた。あるいは気まぐれに上着のポケットにいれたとか、といい胸のポケットを大げさな所作で探ってみせ、これまたないなあと目をまるまるとさせた。まあ、私のポケットを勝手にまさぐるようなひとがあるとは信じがたいことだが、それはいいとしてもまさかキャンディまで盗み取ろうとは！むしろ誉めてあげたいくらいだよ。おじいさんの目はいかにも殺気立っていた。